

順正理論における経主

田端哲哉

一

衆賢の順正理論全八十巻は、俱舍論の半分以上を利用して法の体系化をする半面、鋭い批判的な態度で部分的に否定、否認をもする。そこで三国の伝統では後者の性格が重視されて、順正理論は俱舍論への反駁書であるという位置付けがなされており、筆者も亦これに異論はない。然し、俱舍論は世親により経量部の立場から説一切有部を批判しつつ著わされ、衆賢は逆にその世親の経量部的立場に反駁して順正理論を著述したとする見解には賛同し難い。何故ならば、俱舍論の所謂造論の立場は、論主自らが明言する如く、Kāśīraの毘婆沙師の方軌によって成就されたところを、アビデルマとして説いたものであって、経量部の立場で説いたとは記述されていない事、更に、世親が無著の影響を受けて大乘へ転向した伝えを婆藪槃豆法師伝等により知り得るが、経量部へ転派したという文献を見る事がない等の理由に依る。恐らく、

俱舍論における「経量部説を最善となす」等の部分⁽³⁾や、俱舍論では時に経量部説を取り、説一切有部説を放棄した箇所がある故に、これらを以って世親は経量部の立場で俱舍論を著わしたと判断されたのでは無かるうか。復た、順正理論には「経主は此に於て是の如く釈を作す」等の明記があり、続いて俱舍論中の経量部的解釈を引用して反駁する為に、「世親は衆賢によって経主と呼ばれた程であり、俱舍論はそれ程経量部的な論書である」と看做されたのであろう。然し、果して世親は経量部の立場より説一切有部の教学を批判的に取り扱って俱舍論を著わしたのであろうか。現代の俱舍論研究の立場からは、俱舍論は「説一切有部アビデルマの永い伝統を承けて成立したものであることは、全く異論の余地がない」と明言されている。それ故に、今、順正理論における経主（説）を検討する事により、衆賢が経主を如何に解していたかを考えてみよう。

その為には、(一)順正理論における経主の位置付け、(二)順正

理論に引用された俱舍論の検討、(三)順正理論における「經主云々」と明記される箇所を検討、(四)經主という言葉の梵語と意味に対する言及など、多角的な視野から論究が望まれる。

二

順正理論では、衆賢の立場より多くの部派や論師の所説が引用、紹介され、その取捨の判断を明記する場合が少なくない。その折、俱舍論に用いられた諸説をそのまま受け継いでいる事は当然乍ら、他にも多くの所説を挙げているのは矢張り衆賢の判断基準に依るものである。即ち大別すれば、(一)衆賢が承認する所説と(二)否認する諸説である。(二)の中には、外道、仙人、外教、印度の伝統的諸学派等への言及も含まれているが、最も多い所説は仏法宗内のものである。(一)は勿論仏法宗内の所説に限られているから、茲に(一)と(二)の仏法宗内の所説を調査の対象とすると、衆賢における二種の傾向が判明する。即ち(A)衆賢が説一切有部の教学者の立場から他部派の所説に言及する。(B)衆賢が説一切有部内の一論師、つまり Kasimira 学派の一論師として、同じ部派内の他の論師説を对象とする。而して、經主説はこれら(A)、(B)双方の場で詮議され、決して(A)の立場からのみ論議される訳ではない。従って、俱舍論主世親が Kasimira の毘婆沙師説により俱舍論を著述したと明言するにも拘わらず、その線上を外れた場合が

順正理論における經主(田端)

(B)とも考えられ、この点から經主が經量部の主であるという意味は可能性として零に等しい示唆を受ける。但し、衆賢の判断が常に Kasimira 説に立却しているかという点になると、その例外を見る事もある。俱舍論、順正理論共業品で提示される不律儀の捨に關して、衆賢は明らかに Kasimira 説を放棄して、健駄羅説を応理として如きである。因に、衆賢は毘婆沙師の所説をより一層発展させた新説を立てたり、婆沙論を越えた説を提唱する事がある。佐伯旭雅師によっても既に指摘された衆賢新薩婆多部説を我々も亦、如上の一例より更に確信を高めるのである。

三

順正理論における俱舍論の検討は、曾って少しく言及した故に、極く簡略に記す。玄奘訳で両者を比較すると、順正理論には俱舍論の凡そ六割程度が引用されている事が判る。そこで、引用、非引用の仕方と理由を考えると、各々に三種類を指摘し得る。殊に引用する時は、言葉を多少違える事もあるが、大半は俱舍論の論旨に衆賢が賛同し、Kasimira 有部の教学として積極的に採り入れる事を知る。しかし俱舍論を用いているからとて常に賛同している訳ではない。が、引用して反駁したからとて、それが直ちに俱舍論の法の体系の本質を崩す事に直接結び着くとも考えられない。あくまで俱舍

論の法の体系内における衆賢の異説という範囲である。勿論、衆賢説が、所謂説一切有部教学の正統性を述べることも多々ある。一例を挙げるならば、三世実有論である。三世が実有であると説かない部派や論師は sarvastivāda でもなければ sarvastivāda でもない」と評価される基本的教義が、雑

阿毘曇心論⁽²³⁾では全十二巻中第十一巻の終りに近い所で、それも僅か説かれ、俱舍論、順正理論、顯宗論にても隨眠品の附論という形で取り扱われている事実である。特に順正理論では、會つて考察した如く、俱舍論主が経量部の現在有体過未無体を説くに対して、あらゆる視座より論破し、俱舍論の五倍もの紙幅を費して論証している。しからば、斯様に部派の生命ともいふべき議論を展開するに当り、衆賢は何故俱舍論に無い新しい nidāsa を設けなかつたのであろうか。玄奘訳の俱舍論、順正理論は、ほぼ同時期に漢訳されたのだから、訳語は厳密に選択されたと考えるべきである。が、界品に対しては本事品、根品に対しては差別品、世間品に対しては緣起品と相違しており、それらには当然衆賢の意図が反映している梵語が用いられていたと看做さねばならない。衆賢はそれ程明確な意図を有していたのであるから、三世実有論が隨眠品で展開されねばならない要請があるにせよ、別項目として論議されて然るべきであつた。

衆賢が積極的に承認し、Kāśmīra 有部の学説を披瀝するに

当り、俱舍論を用いる箇所の方が批判的に扱う部分より多いのは否めない。俱舍論の *Abhidhāna* を衆賢が批判的に改造するのは、私算によれば、順正理論で二偈、顯宗論にても二五偈である。この様な俱舍論の著者世親を衆賢が経量部の主という意味で呼称したとは到底考え難いのである。

四

順正理論にて衆賢が「経主云々」と明記して世親説を引用する箇所は、全八十巻中一六八回を数える。しかしこの中二箇所は、未だその出典が判然としない。残る一六六箇所は、俱舍論からの引用で、筆者も會つてその対照表を發表したことがある。その中二箇所について訂正を要するが、順正理論における「経主」は世親を指示すると決定しても良いと考える。さて、この一六六箇所は、総てが衆賢の否認の対象となつていない事に注意しなければならない。例えば、順正理論緣起品にて、俱舍論世間品で上座の二説(有余師と經部軌範師)を論破している部分を経主云々と引用し、衆賢は先ず經主の論破を是と判断する。而して経主の論破は、相手方に対して遠慮がちであると衆賢は指摘し、更に一層厳しく上座説を論責するのである。斯様な箇所は緣起品に都合三回、賢聖品に二回見られ、これらは経主の所説を否認するといふより、むしろ積極的ではないが承認する範例と認めざるを得な

い。それ故に、経主云々と引用し、反駁する一六一箇所の状況を頻度の多い順に眺めると次の如くである。(一)経主の作である *karikā* や *bhāṣya* に対する不満七三回⁽⁴⁸⁾、(二)経主が経量部説を(最)善となすに對する反駁五六回⁽⁴⁹⁾、(三)経主が毘婆沙師説に反論するに對する反駁一四回⁽⁴⁸⁾、残余は、経主が雜心論主説を是とする時、経主が瑜伽師や大衆部説を肯首する時、或いは経主が *apare* の所説を肯定乃至否定する場合等に衆賢が各々に反駁する一八回である。この様な種々の引用状況から、我々は経主が経量部の主として衆賢に呼称されたと判断するのは無理であると考ええる。ましてや「経主とは順正理論で上座と名付ける室利邏多(*Sriḷabha*)の弟子であり、彼らは経部、譬喩師の一派である」(國訳一切経、毘曇部二二卷一三四頁)との解説は訂正されねばならぬと考えられる。

五

順正理論では「経」の意味として、如来の聖教、三藏中の経藏、或いは *Agama* や *Nikāya* 中の単経を指示する諸例⁽⁴⁸⁾を見ることが出来る。しかしこれらの意味の「主」は、如来や釈尊でこそあれ、俱舍論主世親とは考えられない。又、原始仏教で云われる九分十二分教などの *sūtra* は、一定の形式を有する釈尊の教えをまとめたものであると通説であるから、世親がこの「主」と考えることも不可能である。但

順正理論における経主(田端)

し、俱舍論(AK. 86. 12)では発智論の作者を指して *sūtra-kāra* (Cf. Sakv. 314. 25)と言ひ、玄奘訳「論主」であるから、作者とどう意味での「主」の梵語が *kāra* であるに相違なく。Abhidharmadīpa with Vibhāṣanaprabhāvṛti にも周知の如く *Kosakāra* の名の元に世親を呼称してい⁽⁴⁹⁾。

他方、*sūtra* には a short sentence or apophoristic rule の意味があり、称反は(Sakv. 29. 4) *kośa* の *karikā* を指して *sūtra* と解している。山田竜城博士も「一般的に論が経と言われる例は少なくないのである」と指摘されており、漢訳では大智度論に発智経八健度と明記される如く、論と経の厳密な区別をしていない様に思われる。故に、我々は、*sūtrakāra* が経主と訳出されたと予測するのである。然らば、何故 *Kośa* の *karikā* と *bhāṣya* 両方の作者という意味で衆賢は世親を *Kosakāra* と呼ばず経主と云ったのであろうか。その理由を明記した文献を未だ見ないが、*Sastrakāra*, *Sūtrakāra*, *Kosakāra* を説明するにその糸口を見い出せるかも知れない。我々はただ此処にて消極的乍ら、衆賢の言う「経主」とは *sūtrakāra* の訳語であり、俱舍論の *karikā* の作者世親を指示していると指摘するのみである。

(補) 安慧釈 (*sūtri* 341, a 6) に *ṇḍo byed pa* のあるを本庄良文氏より知らされた。記して謝す。(註省略)

(大谷大学講師)